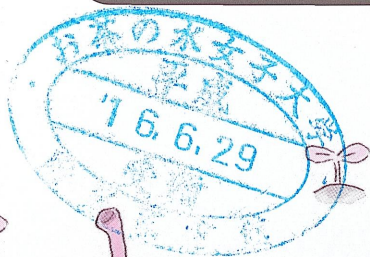


幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園





世界に学ぼう!

子育て支援

デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカに見る子育て環境

世界の子育て環境がわかる。

子育て支援に関して、世界には優れた施策や市民活動を展開している国々が存在します。本書では、デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカの6か国を取り上げて、社会背景とともに育児理念・法制度・保育サービスの種類などを紹介。コミックやコラム、各種データも盛り込み、これからの子育て支援、社会のあり方を考えるうえで役立つ情報満載の一冊です。

本書の内容(目次より抜粋)

- デンマーク……………親の参加が義務づけられる運営協議会／普遍主義とノーマライゼーションを理念に
- スウェーデン……………世界一の女性就業率を支える保育サービス／1歳までは育児に専念
- フランス……………卓越した家族給付と保育・教育システム／2時間の昼食とふんだんな休暇
- ニュージーランド……………疑似パウチャー制度による保育支援／伝統的な暮らしぶりが増加する離婚
- カナダ……………市民活動に支えられる子育て支援／厳しい生活状況と高い女性の就労率
- アメリカ……………保育行政の遅れを補う民間の体制／保守的な育児観と軽視される保育

汐見稔幸編著 大枝桂子構成・文 A5判 208頁 定価：本体1,800円＋税



簡単
手作り

中谷真弓の
エプロンシアター
ベストセレクション

ポケットから生まれる、とっておきの物語!

エプロンシアターの考案者、中谷真弓先生によるベストセレクション。「名作赤ずきんちゃん」「これくらいのおべんとうぼこ」「なぞなぞパン屋さん」「誕生日おめでとう」を収録。エプロン・人形の作り方の基本、原寸大型紙付きで、すぐできる!

中谷真弓著 AB判 80頁 本文(カラー40頁/2色40頁)
定価：本体2,200円＋税



キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第103巻 第5号



幼児の教育 目次

— 第一〇三卷 第五号 —

© 2004
日本幼稚園協会

巻頭言 多面的でダイナミックな子ども理解の素材を求めて

— 映画と物語の活用 — 大戸美也子 (4)

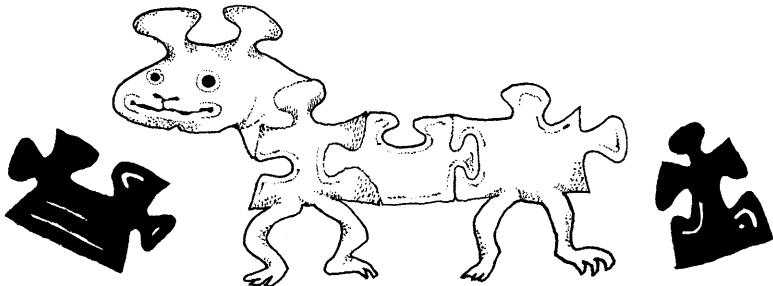
障害をもつ幼児の保育(21) — この子と出会ったとき —

聴くこと・子どもの成長の中で 津守 真・津守 房江 (10)

子どもと出会う(7) 子どもの積木 岩田 純一 (15)

「遊び」雑感 その五 好きな遊びを通して他児と出会う 吉村真理子 (26)

はれ! ときどき その② さとうひろこ (33)



特集〈眼・目〉

科学者の眼・芸術家の目	渡辺 純一	(34)
瞬き	尾形 節子	(38)
冬芽の涙	高柳 芳恵	(42)
見る力	北島 尚志	(46)
退職園長による子育て塾(3) 親も楽しむ	戎 喜久恵	(50)
「漠然とした迷い」に向き合うこと	金井 彩	(58)

表紙絵／藤原ヒロコ

扉題字／津守 真

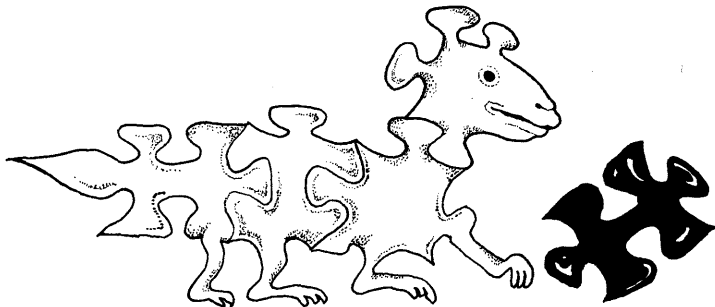
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

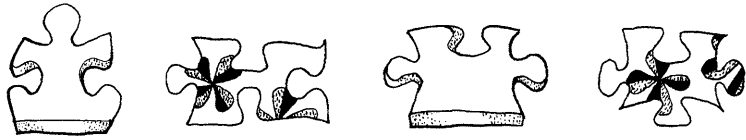
カット／彌永たたえ

編集委員／田代

和美・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子・仲 明子





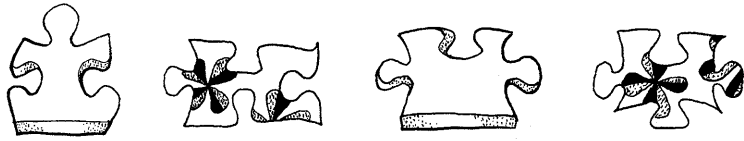
巻頭言

多面的でダイナミックな 子ども理解の素材を求めて

— 映画と物語の活用 —

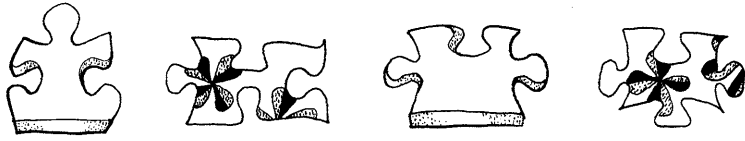
大戸 美也子

このところ「子育て支援」という言葉がすっかりわが国に定着し、「子育て」と「支援」とは切り離せない関係になってきた。幼稚園でも、保育所でも、各自治体もNPOもそれぞれ思い思いの「子育て支援」事業を展開し、今や「支援」の自由競争に突入した感がある。こうした時代だからこそ実態の把握、問題の把握が重要となり、各種の調査が求められ、実際大小さまざまな調査がすすめられている。そ



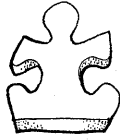
ここで明らかになりつつある調査結果の一つとして、「支援事業によって育児負担感軽減の目的は果たされているが、親としての養育力の向上の支援になっていない」（金谷・他 二〇〇四）という指摘は注目に値する。昨今隆盛をみている子育て支援事業は、もともと行政が少子化に歯止めをかけようとする政策目標を実現するための手段としてはじまり、子育ての当事者は親であるという前提のもとに、親の育児負担の軽減をねらっていたのだから、この結果は支援プロジェクトの目標は一応果たしていることを示唆している。しかし、肝心の「親の養育力」の獲得に必ずしも結びつかないとしたら、今度は子どもの生活や成長に直接かわる人々の知恵や知見を出し合って養育力を高めることに貢献する事柄をいろいろ提案していくことが重要であることは明らかである。「子育て支援の実態と課題」については、日本保育学会課題研究委員会が第五十七回大会においてシンポジウムを企画し、最新の研究成果が報告される予定なので、詳しい内容はシンポジウムの展開に譲るとして、ここでは親の養育力の一部である子ども理解の在り方について啓発された二つの素材を紹介してみたい。

ひとつは、アイスランドの映画『ムービー・デイズ』である。ムービー・デイズとは、映画が娯楽の王様であった時代という意味で、映画が一家の楽しみであり、



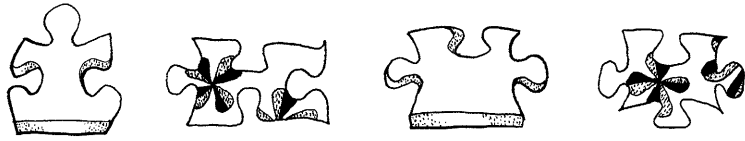
映画の主人公に危機が迫ると「あぶない！」とスクリーンに向かって声をあげ、危機を乗り越えると拍手喝采した時代、一九五〇年代はじめに、アイスランドの首都レイキャビックの米軍キャンプの撤去後払い下げられたカマボコ兵舎で暮らす庶民の暮らし、特に子どもの生活と成長を淡々と描いた地味な映画である。しかし、ここに登場する子どもたちのすることなすことがかつて自分もやったり、目撃したことばかりで、時代と子どもの日常の類似性と共通性に大いに驚かされた。雪解け水で渾みの道やその水たまりさえ遊び道具に変える子どもたち、背広を着た大人たちが行き交う通りを遊び場に変える子どもたち、大人をひやかし笑い者にする子どもたち、見慣れぬ大人を追跡しいろいろな秘密を探る子どもたち…子どもたちは彼ら独自の生活を力一杯展開しつつも、大人たちと家庭や路上や映画館で出会う機会の何と多かつたことか。そして、大人もまた子どもたちが身近にすることで彼らの豊饒な世界をかいま見たり、子どもとのつきあいの面白くもあり一筋縄でいかないもう一面の理解をも深めていたことを教えてくれるのである。

この知らず知らずの内に身につけてきた多面的でダイナミックな子ども理解は、あつちどころがりこつちどころがりしながらやがて自らの足で前進する子どもとつきあっていく上でどれほど有効であるかを、私たちはしっかりと認識する必要がある。子どもたちが身近な存在ではなくなり、大人たちの目に写る子どもは物理的



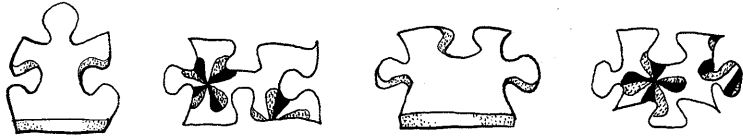
に少ないばかりか、心象的にも貧弱なものになってきている。そうになると、多面体の子どもの一面だけをみて別の一面が出てくると急に不安になったり、あるいは子どものある一面だけを伸ばそうと親のしいた路線に子どもをのせ一直線にすすむよう後押しすることに専念することになる。これでは、子どもはまるでボウリングのボールのようなもので、得点獲得のためにひたすら邁進するだけの存在、後押しされなければ動かないものに成り下がるしかない。子ども理解を広げ、貧弱なイメージを広げる素材として『ムービー・デイズ』は秀作と思うのであるが、残念なことはマイナーなアイスランド映画であるため上映機会が極めて限られていたことである。

もう一つ、子どもの多面性を理解し、やんちゃで聞き分けのない子どもが成長の階段を上り続ける過程で大切な大人の役割について考えさせられる素材として、嘘をついて鼻がのびる操り人形の物語『ピノッキオの冒険』を紹介したい。昨年二月、イタリア文化使節としてリミティ先生（OMEPP前イタリア国内委員長）が来日され、彼女の『子どもの人権』についての講演会に出席し、思いがけずピノッキオに再会することになった。多くの人が子ども時代にこの本に出会い、粗筋だけは覚えておられることだろう。今回、改めて読み直してみても、これは操り人形がよい子なって人間に生まれ変わる「成長の物語」であることがわかった。ピノッキオ



は、元気に飛び回りじっとしていることは苦手、自分の要求が聞き入れられないと大泣きする、勉強は嫌いだが安易で楽しい話にはすぐ乗る、誘惑には弱く約束は忘れる、ひどい目に会うたびに反省するが同じ過ちを繰り返す、甘いものは大好きだが薬は飲まない……やんちゃでいたずら好きの子どもの特徴を一身に集めた明るく魅力的なキャラクターである。この物語は、一八八一年（明治十四）作者C・コッローディ（一八二六～一八九〇）が五十五歳のとき、当代一流の作家・評論家が寄稿していた『ファンファアラ』紙の付録『子ども新聞』に連載した読み物「あるあやつり人形のおはなし」として始まった。毎回子どもの創造力をかきたてる仕掛けと工夫があり、つぎの話に引き込んでいくような話しの展開に、当時から子どもたちの人気を集めていた。だからピノッキオが森の中でおいはぎに大きな櫛の木につり上げられ「死神」が近づく場面（第十五章）で中断したとき、小さな読者の抗議が殺到し、死の直前のピノッキオが妖精に助けられるところから再スタートしたエピソードをもつという（藤澤 二〇〇三）。ピノッキオは、コッローディの創作であるが、ピノッキオを自分と一体化した子どもたちの後押しがなければ、『ピノッキオの冒険』は生まれなかつたのである。

コッローディは、ピノッキオをしばしば家から外へ連れ出し、人間だけではなく、コオロギやカタツムリなどの昆虫から植物やキツネ、ネコ、イヌなどの動物と



も自在に交流させ数々の冒険の機会を与え、挫折と回復を繰り返しながら成長の階段を上らせようとしている。そして、挫折のたびに彼を支える代表として妖精とジュペット爺さんを登場させる。どんな失敗をも許し助ける寛容な妖精と深い愛情をひたすら与えつづけるジュペット爺さん。これらは養育力の姿を変えたものとみることでもきよう。ピノッキオは、やがてこの二つの大きな存在に気づき、彼らの困難を助けるために力を貸したとき、操り人形から人間へ、すなわち自らを操ることのできる自律した人間へと変身するのである。

ピノッキオをはじめとする身近かな物語の中に潜在する人間教育的な価値を発見して養育力の栄養にしたいものである。

(武蔵野大学)

参考文献

- 金谷京子・他「子育て支援の実態と課題」日本保育学会第五十七回大会発表論文集二〇〇四
藤沢房俊『ピノッキオとは誰でしょうか』太陽出版 二〇〇三
ポール・アザール『本・子ども・大人』矢崎源九郎・横山政雄訳 紀伊国屋書店 一九五七



障害をもつ幼児の保育(21)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

聴くこと・子どもの成長の中で

M 保育の中で、子どもが何を聴いているのかを知るのは、本当に難しいことです。

特に言葉で表現しない子どもから、その子に何が聞こえているのかを知ることが、保育中だけでは無理なときがあります。

子どものことを

分らないまま出会い保育する

F 初めて子どもに出会うときには、あなたは子どものことは知らないことが多いのですか。

M そうね。病院や相談所の診断や所見を持つてく
ることは多いけれど、それよりも私が直接に出会っ
たときのことや、一緒に遊んで分かったことを大事
にします。心に残ったことを記録したり思い回らす
ことを大切にしています。それでも随分長い間、記
憶や記録の中に、分からないまま保っていることが
あります。

F 分からないまま保育をするのと、分かって保育
をするのではどこが違うのでしょうか。いま、私
は幼い孫を見ることが多いのですが、若いとき分か
らないまま子どもを育てていたときには緊張感や不
安があつたけれど、その分発見の喜びも大きかった
です。いま、孫の育児にかかわるときには、不安や
緊張感が少なく、いとおしむ喜びがありますね。
M それと共通するものが愛育学園での私の保育の
中での在り方です。若い保育者の真剣さのそばで自
分も考えたり後で話しあつたりするのが、いまの私

の喜びです。

子ども自身遊びの中で本当の自分を探しているの
を、若い保育者が分からなくて真剣に考える。もし
て子どもと大人が一緒に何かを見つけて成長するの
でしょう。保育者は自分の枠を取り払って自分から
出て行く柔らかさが必要なことを、私は最近とくに
痛感しています。

F それで分かりました。

あなたが保育の基本の中で第一にあげているの
は、「出会う」ということですが、大人が自分の常
識の枠を取り払って、自分の枠から「出て」「会う」
ことですね。

「居て会う」のではだめでしょうか。(笑い) 家庭
での育児ではそんなに意識しなくても、一緒に生き
て「会う」ことをやっている。出会う基盤が出来て
いるともいえるし、出会う必要を感じなくなってい
る危険性もありますね。

M子さんとの出会い

M 以前、四年生くらいで転校してきたM子さんが、流しのところで水を出して遊んでいたのです。

初めのうちはこの子が音に敏感で、繊細な感覚をもっていることに私は気が付きませんでした。その子がままごとのお皿を何枚も重ねて、その上から水をちよろちよろと流すのを見て、わたしはなぜお皿を重ねているのか、この子どもにとつてどのような意味があるのかそのことが心に残りました。

でもよく分からなかったのです。それは「重ねる」ということに私が捕らわれていたからかもしれない。分からないまま心に抱いて長い時間がたったのかな。

後になって重なったお皿に水が流れると、音階のように柔らかな音の変化があったのかと気が付きました。

F その話はM子さんが愛育に來始めたころです

ね。その後流しに金属の洗面器を伏せておいて、そこに水を細く流して座り込んでいましたね。水の音を聴いていたのですね。

私は水琴窟のコンサートに行った時、穴の中に水がめを伏せて置き、その底に水が当たったときに出る、静かな澄んだ音をたのしむことでしたが、これはM子さんが毎日やっていることと同じだと思いました。そのコンサートで私は水の音が心を落ち着かせてくれるのを経験しました。

子どもの中に音に対する恐れや不安もあって

M でも楽しい美しい音だけでなく。恐れや不安を引き起こす音もあって、それによってパニックにな



る子どもか何人もいました。

乗り物のなかで大声で話す声や、高いキンキンした声、押し潰したような声など、どうしても我慢ができない音が、子どもによってはあるのでしょうか。ある子どもが同じクラスの子どもの声におびえることがあったときは、本当に困りました。おとなには分からないほど遠くから、嫌いな声に気が付くので、親とも何回も話し合ったこともありました。どちらも大切な生徒ですから……。

F M子さんの場合は、この子の好きな童謡をそばで歌うことによって、嫌いな音を和らげるようになりました。お母さんはそれを「音の煙幕」といわれましたね。だから乗り物の中などで小さな声で好きな童謡を歌ってあげると静かにしていられるのです。周りの人からもそれならそんなに迷惑がられない。

外国に行くときも好きな童謡をテープにいれて、

それをヘッドホンでききながら飛行機で過ごしたそうです。

音楽によって開かれるもの

M 愛育には音楽や造形を専門とするアートテイチャーが何人かいて、保育の中で自然なかたちで音楽を楽しんだり、絵をかいたり、物を作ったりの活動を大事にしています。M子さんも音楽の先生がくる日には、楽しんでいましたね。

F 先生の話によると、お気に入りの童謡だけでなく、モーツァルトのような曲をピアノで弾くと、流しのそばで水を流して聞いていたそうです。小学部の高学年のころはそうやってピアノの水の音との合奏が始まったようですね。

M そうそう、嫌いな音にたいしてははっきり拒否するから、穏やかに水を流しながらそばにいます。は、M子さんの心に滲みる音楽だったのでしょう

ね。小学部を卒業してしばらく外国に家族で住んでいましたが、そのころはピアノでお気に入りの童謡を自分で弾いたり、自分で作った曲を弾いて一日の大半を過ごしたそうです。二十歳のお祝いにそのピアノ曲をアレンジしてCDを作ったこともありましたね。

F M子さんのCDを作ったのは、お母さんが「自分へのご褒美」と言うようなことを話していられました。

M あれは台所の洗い物の音なども入っていて、とてもユニークなCDでしたね。

F 最近音楽の先生のとこでピアノを弾き合っていて、合奏のようにしたりしているとのことですよ。

バッハを先生が弾いたとき涙を流して泣いていたこともあるし、楽しい曲にはおかしそうに笑ってしまふときもあるそうです。音楽によって感性や感情の表現が磨かれたように思えるのです。

「もう一度幼児期に戻ったとしたら」

——お母さんの言葉

M お気に入りの童謡を繰り返し人に歌ってもらうことは、M子さんの場合、いままありますけれど、それが不安から逃れるためとか、コミュニケーションのためとかいうだけでなく、そんな中から音楽によって自分の深い思いを表現することを始めたのでしょう。

F この間、お母さんにお会いしたとき「もし二十年前に戻ったら……今度はM子の気持ちに添ってやります。以前は私の願いの方に引張ってばかりいたから」と笑いながら爽やかに話されました。

M 子どもと共にお母さんも成長されたのですね。

子どもと出会う(7)

子どもの積木

岩田 純一

子どもは積木を使って色々な遊びを行う。積木といってもその大きさや材質は多様であり、大きさでは大型積木から小さな床上積木まで、材質も木製やコルクの積木、プラスチックやウレタン素材のものなどがみられる。

子どもはこれらの積木を使って、色々な楽しみ方をしている。ごっこ遊びのなかで、大型の積木を組み合わせて家や電車、宇宙船を作るとか、ただひたすら高く積み上げては、それを倒すといった遊びに熱中している子

どもたちもいる。ごっこの世界で想像的なイメージをふくらませて遊んだり、バランスをとりながら高く積んでいく緊張のあとに、積木がバランスを失って一挙に倒れるという開放の感覚を楽しんでいる。

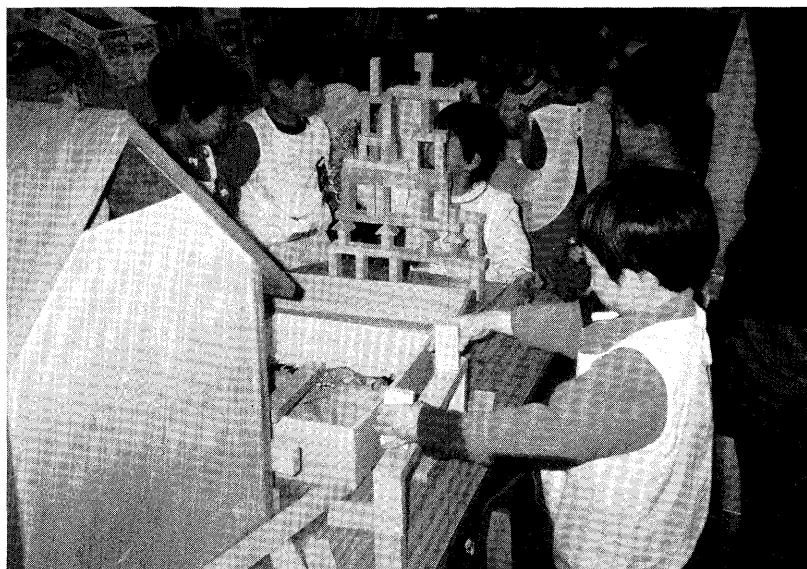
積木を積む

子どもは積木をみると、文字通りにそれを積み始める。積木が子どもに積むという行為を催促するかのよう

にさえ思われる。しかし、その積み方や遊びをよくみてみると、クラス年齢によって興味深い差異が特徴的にかがえる。

年少の三歳児では、床上積木を積んでも同じような大きさのものをただ積み上げていくだけである。年少も後半にはバランスをとりながら高く積み上げ、それが倒れる瞬間が面白く、積んでは壊すといった遊びをくり返すのみみられる。ここで興味があるのは、年少児は積木を隙間なく積むことである。この年齢では積木を積むとしてもそこに隙間を作ることができないのである。年少児にとつては、積木遊びのなかで隙間空間を作り出すことが難しいようである。同じことは、ごっこ遊びにおける空間づくりにもみられる。保育室の片隅にすでに仕切つてあるままごとコーナーを利用して遊ぶとか、衝立やテーブルなどによって囲われた空間があると、そこに入つてお家ごっこをされるといったことはみられる。しかしながら、中型や大型積木などを使ってじぶんでそのような囲い空間を作つて遊ぶことはまずないのである。

その様子は年中児に入ると大きな変化をみせる。その変化とは、床上積木を積んでも隙間を作れるようになることである。それは、まず二つの積木を離して置き、その上に他の長い積木を横に差し渡すといった、いわゆるアーチ型の積み方が可能になってくるのである。それはトンネルや橋になり、差し渡した積木の上に三角積木を置くと家に見立てられる。そのアーチ型を基本形として、子どもは差し渡した横の積木を土台にして、その上にまた同じように積木を積んで二階、三階建ての家を作るといった形態が特徴的になってくる（写真1）。年少児も四歳になる頃には偶然にアーチ型を作ることのみられるが、子どもが意図的にアーチ型の空間を作り出すのはなかなか難しく、一般的にみられるのはやはり年中児になつてからである。線路をつないで汽車を走らせる遊びにおいても、積木でアーチ型の橋やトンネルを作つて、そのなかをくぐらせるといった様子がみられる。しかし年少児ではやはり、たんに出来合いのプラスチック製の半円筒のトンネルを線路の上にかぶせて遊ぶだけで



▲写真1 アーチ型に積む

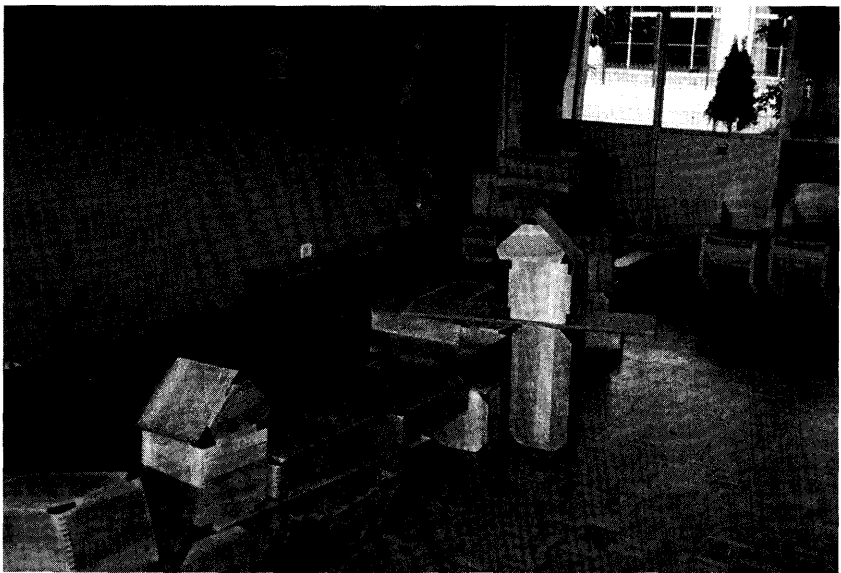
ある。

ところで積木をアーチ型に組み合わせるには、一番目の積木を置き、それと離して二番目の積木を適当な距離に置く行為が、それら両端をつなぐ三番目の積木を置くといった予測のもとになされる必要がある。ただひたすらに重ね合わせていくのではなく、アーチ型の構成には空間・時間的な先の見通しが必要になってくるのである。すなわち、このような積み方の中に、時間・空間的な見通しのもとに事象を構成していく子どもの力の育ちをうかがうことができる。

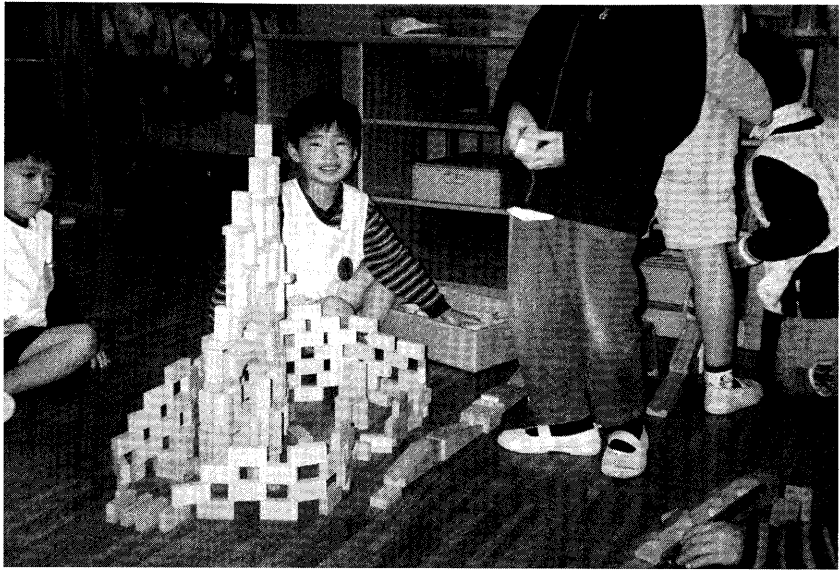
このように隙間を作る能力は、中型や大型の積木を使った遊びにも並行してみられる。年少児ではそれらの積木を使っても、三角や四角の積木をかたまりとして寄せ集めてただ積み置くだけである。ときに立方体や直方体のコルク積木を積み上げて「ひこうき」に見立てたりもするが、その内部に囲み空間（隙間）をつくることはまず難しい。そもそも積木を囲って空間を作ることがまだ難しいのである。しかし年中児になると、土嚢のよう

に積木を辺状に積み並べて囲い空間を作ることができるようになってくる。そして子どもは、そのように仕切った囲い空間をお家や、電車などに見立てて遊ぶようになる。さらに、そのような空間をさらに運転席とそうでないスペースに区切つて遊ぶといったこともみられる。しかしながら、そのような囲み空間の作り方には、まだ年中児に特有な制約もみられる。それは、積木で囲むとしても、部屋の隅の壁面などを利用し、それを三辺で囲んで四角な囲いをつくるといった仕方が多いことである（写真2）。四辺とも積木を使って空間を仕切るとしても、それほど多く目にすることができない。それが一般のようになってくるのは年長児に入ってからである。

年長児になると、床上積木の構成においても年中児とは異なる発展的な形態がみられるようになる。それは、基本的なアーチ型を要素として、それを縦横につなぎながら網状に組み合わせて円筒状の塔や建物を作るといった、より複雑で立体的な構成がみられることである。年長児ではアーチ型を構成単位として複雑に組み合わせ



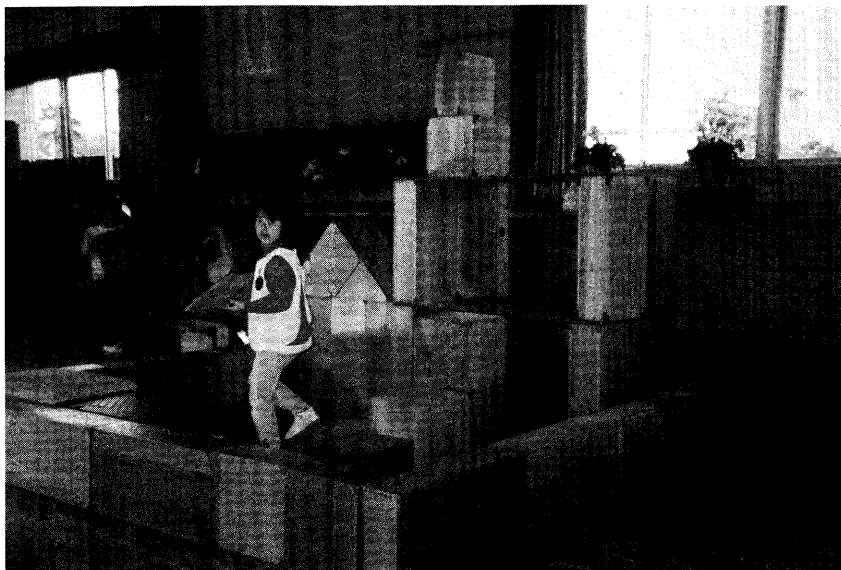
▲写真2 年中児の囲み空間



▲写真3 アーチ型の発展形態

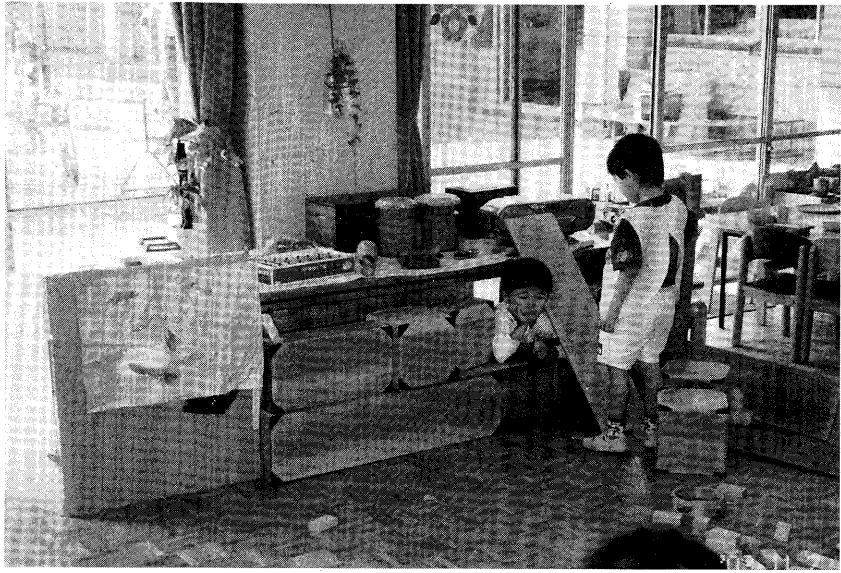
て、もう一つの内部空間（隙間）を入れ子のように作り出すことができるのである（写真3）。そのような製作過程のなかに、子どもがじぶんの構想をもって、さらなる時間・空間的な見通しのもとにじぶんの行為を計画的に遂行していく能力の育ちを読み取ることができる。

そのことは大型積木を使った年長児の遊びのなかにも反映されてくる。年長児ではたんに囲った空間を作るだけではない。ごっこ遊びのなかで複数の囲い空間をつぎにつなぎ合わせて遊ぶといったことが一般的にみられるようになる。このような空間の拡がりだけではない。年中児にみられる囲い空間はまだ平面的であり、垂直方向への拡がりはあまりみられない。しかし年長児になると、広い遊戯ホールなどで立体空間を作ってごっこ遊びを楽しむようになる。さらに年長児はそれらの立体空間をいくつかつなぎ・拡張していくといった空間作りの拡がりもみられる。じぶんの背と同じくらいか、それともじぶんの体がすっぽりと入るような立体的な囲み空間を仲間と共同で作るようになってくるのである。（写



▲写真4 囲み空間の立体化

真4) 積木を足場としながら積木を上へ上へと積み上げていく。またオープンスペースだけではなく上から覆って閉じた空間を作り、そこに入って遊ぶのも年長児になってみられることである。たとえば大型積木を高く積んで立体的な部屋を作り、その上に板を何枚か差し渡し、入り口が一部だけ開いたスペースを作り、中に入れておぼけやしきごっこをしている。このような閉じられた内部空間は、まさにアーチ構造の立体化といえる。もちろん年中児でも、じぶんの身を潜ませる空間づくりがみられないことはないが、やはり壁面に置かれた机を利用して、その周りを積木で囲い「秘密の基地」にするといった水準のものである(写真5)。年長児が構成する立体的な空間は、ごっこ遊びのなかでお家、宇宙船、ロケットとさまざまな見立て空間になっていく。年長児には、じぶんの身を潜ませる空間や、じぶんが上下に移動できる立体的空間を自らが作れるようになってくるのである。確かに年中児でも、ときに椅子の上のりながら身の丈より大きいアーチ型をつくることもみられる。し



▲写真5 机の下の秘密基地

かしながら、それはまだ壁のように面的なままであり、そこに登りそこに身をひそませるような立体的な内部空間を作ることはまだ難しいのである。このように年長児では、囲い空間を垂直方向へと立体的に立ち上げていくことができるようになってくるのである。

積むと話す

積むという行為は、初期言語の発達とも関連が深いようである。一般に一歳半という頃は、一語表現から連語表現がみられ始める時期である。岩堂（一九八五）は、その一歳半検診時において言語発達の遅れが疑われても、「積木を三つ積む」という課題ができれば、三歳検診時点の言語発達では一般的な言語発達に追いつくという。その因果的な関係は明確でないとしながらも、彼女は多くのケースから一歳半の時点において「積木を三つ積める」ことが、言語発達の予後を予測させる指標になると示唆している。おそらく、ことばを一語から二語、三語表現へと時系列的につなぐ行為が、土台となる積木

の上の一つ、二つと積み上げる時系列的な構成行為と何らか機能的連関をもっているであろう。

ところで、ことばを話すことは音韻をつなぎ単語を作り、その単語をつないで文していく時系列的な構成行為からなっている。グリーンフィールドという心理学者は、三歳から六歳半の子どもたちに図Ⅰのようなアーチ型の積木モデルを提示して、それと同じものを作るように求めている。

モデルⅠはもつとも単純なアーチであり、二つの離れた下位積木の上の一つの上位積木を差し渡すという構造である。モデルⅡは、モデルⅠで構成されたアーチそのものを下位積木（土台）として、さらにその上に上位のアーチを組み立てるといったより複雑な構造になる。モデルⅢではさらに複雑になり、今度はモデルⅡで構成されたアーチを土台の下位積木としてさらにその上にアーチをつくるといった高次な構造になってくる。子どもにとってはⅠ→Ⅱ→Ⅲの順序で難しくなっていく。それは、モデルⅢを作ることができる子どもは、ほかのモデ

ルも完成することができるという順序性や一貫性がみられるからである。図Ⅰには、二人の子どもの反応例があげられている。子どもAは、モデルⅠのみが可能な水準にある。したがってモデルⅡやⅢをみせられても、もつとも単純なアーチ構造を作るだけに終わる。子どもBはアーチ状に積むことがまだ難しい水準の子どもである。すべてのモデルに、単に積木を隙間なく積み上げるといった行為がみられない。

その結果、三、四歳はせいぜいよくてもモデルⅠの水準であり、五歳児になるとほとんどがモデルⅠ、Ⅱを完成することができるようになる。さらに六歳半くらいになると、大部分がモデルⅢを作ることが可能になってくるという。この研究のように手本をまねてアーチを作る場合には、自発的な構成によるよりも少し早い時期から可能になるのかもしれない。しかし、今まで筆者が分析してきたとほぼ同じような発達過程がここにはみられる。モデルⅡやⅢでは下位と上位のアーチの方向が違うが、このような積み上げ方が可能になるからこそ、立体

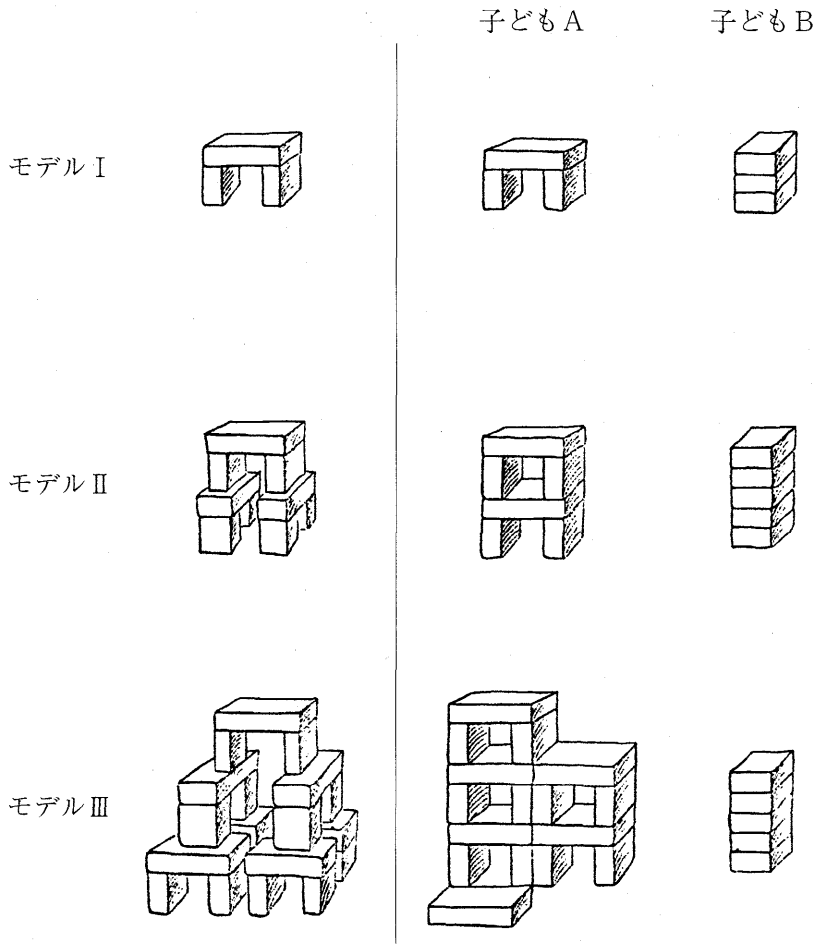


図 1 積木の課題

それぞれのモデルをA、Bの子どもが
まねて組み立てたものである。

的な建造物を作れるようになるのである。

これからグリーンフィールドは、階層的なアーチ型を組み立てる行為の文法と言語の文法の獲得は、共通の普遍的な認知構造が支えられており、両者の発達にはパラレルな関連性がみられるという。彼女は文と文をつなぐ、文のなかに文を埋め込んで長い文を作るといった文法の構造化が積木を構成する行為の文法と対応関係にあることを示唆している（岩田、一九九二）。これらの対応関係は、まだ類推の域を出ないものではあるが、発達の機能的な連関性を考えるとき興味深い。

やいばこ

年中児は積木をアーチ型に積めるようになり、それらは家やトンネルに見立てられる。また、中型や大型積木で囲い空間を作り、それをお家や電車に見立てて遊ぶこともみられる。しかし年長児にはさらに大きな変化がみられるのである。床上積木ではアーチを網状に組み合わせる内部空間をもつ立体的な建物が作れるようになって

くる。また大型の積木を使った空間作りにおいても変化がみられる。年中児の囲い空間はまだ平面的であるが、年長児にはそれが立体的な構造として立ち上がり、身の丈以上の立体的な囲み空間を作れるようになってくる。

身がすっぽり入る空間、身を隠す空間を作り出すことができるのである。さらにそれらの囲み空間をつなぎながら巨大な建造物をつくっていくこともみられ、それらはお家、お城、宇宙船、ロケット、迷路、おぼけやしきなどになる。この年中から年長児への変化には興味深いものがある。

段差のあるところをホイと飛んで降りるのは、年少児の挑戦的な遊びにもみられる。しかしながら、じぶんの身の丈やそれ以上の高い場所に登っては、そこから下のソフトマットに飛び降りるのは年中児になってからである。ホールの隅に積んである跳び箱の上からマットに競って飛び降りるといった遊びも目にする事ができ。年中児になると、身の丈以上の場所から飛ぶことに熱心になる。子どもの身体活動の空間が身の丈を越えて

垂直方向に拡がってくるのである。このような立体的な活動空間への希求、身の丈を超えた身体活動の空間的な拡がりこそ、それが年長児に入って自らが身の丈を越えた困い空間を作り、その上に登ってそこから降りたり、身をすっばりと潜ませるような立体的空間を立ち上げていく原動力になっていくようにも思われる。

このように積木の発達のな変化をながめてきたが、それらが子どもの空間の認識、空間における自己身体の認識、行為の計画や時系列的な遂行能力、さらにはことばを時系列的に紡いでいく行為の発達と密接につながったものであることがうかがえる。このような視点から、保育のなかで子どもの積木をみても興味深いのではなからうか。

(京都教育大学)

参考文献

- Greenfield, P. M. 1976 The grammar of action in cognitive development. In D. O. Walter, L. Rogers, and J. M. Finzi-Freid (Eds.), Conference on human brain function. UCLA Brain Information Service/Brain Research Institute. pp. 67-73.
- 岩堂美智子 一九八五「乳幼児の精神発達」創元社
- 岩田純一 一九九二「ことばの獲得と発達」岩田純一・吉田直子・山上雅子・岡本夏木著『発達心理学』有斐閣

「遊び」雑感 その五

好きな遊びを通して他見と出会う

吉村 真理子

戸外に出てみよう

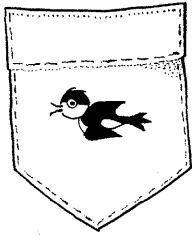
多彩だった新芽の色が次第に若葉の緑に変わる五月。園庭にはさわやかな光と風の中で入園当初の混乱を通り抜け、それぞれに自分のやりたいことを見つけて遊ぶ子どもがあふれている。そう、

五月の遊びはこの気持ちのよい戸外で思い切り身体を動かす喜びと解放感にまざるものがあるだろうか。

気温が上がるにつれ衣服を少しずつ脱いでいくように、子どもたちは家庭からの束縛をほどいていく。「そんなことしたら汚れるでしょ」「あぶな

いから登ってはだめ」という声はもう聞こえない。砂場に池をつくるためにバケツで水を運んでいる子の足は泥だらけ、しゃがんで砂を掘っている子のズボンの裾も水浸し。保育者がシャツやズボンの裾をまくりあげてやってもとても追いつかない。「おーい、水もつといるぞ、早くはやく」「だれか手伝ってよ」といつのまにか知らない子ども同士が遊びの仲間に加わっている。

五月の子どもの様子は、園生活にも慣れ、それぞれが自分の好きなことに取り組んで遊び始めている頃だ。次の保育目標は、そこで共通の興味をもった子どもたちが出会い、友達関係が結ばれるような環境を用意して経過を見守っていくことである。ブランコ、ジャングルジム、すべり台などの固定遊具



で、あるいはうさぎ、にわとり、小鳥、金魚などの飼育物にかかわりながら子ども同士は親しくなっていくが、ここでは、どの園でも普通に見られる砂場での遊びを例に、そのことをどう見るかについて考えてみたい。

感覚の楽しみから試行錯誤へ

砂場は多様な目的に適う格好の遊び場である。四歳で入園したHは、何をしようかと思いつきながら砂を掬ってはさらさらこぼしているうちに「そうだ、お山をつくらう」と自分のやりたいことが次第に形になっていくおもしろさを体験する。山をもっと高くしようとつべんに砂をかけても流れ落ちてしまかなか大きくなならない。周囲を見回すと年長児がじょうろで水をかけながらぺたぺた叩いて固めている。あんな風にするのかとカップで水を運んできたが小さな窪みができ

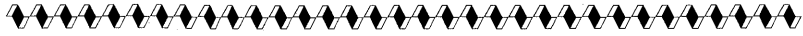
ただけ。

それを見ていたGが「いっしょに作ろうか」と
じょうろで水を運んできた。Gも年長児のような
高い山を作りたかったのだろう。二人でせっせと
水を汲んできたので山はセメントこね場のように
なっってしまった、「ぐちゃぐちゃだ」とはだしてこ
ねまわしている。「おもちみたい」「おだんごつく
れるよ」と今度は手で握ったり丸めたりし始め
た。「何作ってるの、わたしも入れて」とE子が
やってきて「ねえ、おにぎり屋さんになろうよ」
と、砂場のふちにだんごのようなものを並べ、小
石を梅干し、葉っぱを海苔だよといいながらのせ
ている。E子のアイディアをおもしろがってHも
Gもトッピングにする材料を探しに行く。おにぎ
り屋の発想が人気を集め、しばらくはいろいろな
子どもが仲間に加わったり行きずりの子どもが買
いにくたりでにぎわっていた。

女の子たちはトッピングを飾るおもしろさから
か、いつのまにかケーキ屋に商売替えをしてケー
キのデザインを工夫することに夢中になってい
る。最初は山を作りたかったHとGだが、おにぎ
り作りもなかなかおもしろく、女の子といっしょ
に握りやすい砂の堅さを工夫したり型抜きに使う
茶筒のふたなども見つけて楽しそうに遊んでい
た。

イメージをふくらませる

しかし、年長児が他の遊びをするために砂場か
ら引き上げてしまうと、HとGは年長児が残して
いった大きな山のそばに行き、賛嘆の表情で撫で
ている。こんな山を作りたかったのだ。これは
五、六人グループの労作でとても二人の四歳児の
手では無理なのだが、そこで遊ぶのが嬉しいとみ
え、木切れを人間に見立てて山に登らせたりすべ



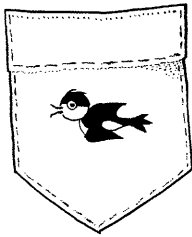
らせたりしている。そのうち、道をつくりそれが川のイメージになったのか棒切れを見つけて橋をかけ「がらがらどんだ(註)」といいながら日がさっきの木切れをもって渡らせていると、Gがトロールになって「だれだ、おれのはしをがたがたさせるやつは」とどなっている。二人はその場面がよほど気に入ったらしく、そこだけ何回も繰り返しはゲラゲラ笑っている。笑い声に誘われて寄って来た子どもたちが、だれが大きいがらがらどんになるかで言い合いになり、とうとう橋も川もめちやめちやに壊してしまった。(註 絵本『さんびきのやぎのがらがらどん』北欧民話、マーシヤ・ブラウン

絵、瀬田貞二訳、福音

館書店刊行、昨日担任

がおべんとうの後でみ

んなに読んで聞かせた)



子どもの行動の意味を理解する

この一連の経過を見てみると、遊びに一貫性がなく状況によってくるくる変わっているように見えるが、五月の四歳児としてはこれで十分豊かな遊びではなからうか。

仮に、保育実習生(保育経験がほとんどないというほどの意味)がこの場面の指導を任せられたとしたら、日の最初の行動(ただ砂をもてあそんでいる)を見て「さあ何を作ろうかな、お山にする? それともお池にしようか」などと砂遊び道具のシャベルを出してやったかもしれない。それでは遊びの方向づけをしてしまい自分で考える機会を奪うことになる。

また、水を加えようとカップで運んでいるのを見たら「先生が手伝ってあげるからこれにお水を入れて来て。少しづつかけながら叩くのよ」と、



じょうろを渡したかもしれない。そうすると、試行錯誤の経験がもてないばかりか、たとえ立派な山ができて本人は達成感が味わえないのではないか。

おにぎりやケーキを作り始めたのを見たら、看板やお金を作るアイデアを出してお店屋さんごっことして発展させようと思うのは短絡的で、現在の子どもの興味は作ることであり、まだお店の形や販売の仕方には関心が及んでいないことに気づくべきである。

「がらがらどん」ごっこは、よくぞ昨日の絵本を覚えていて遊びに取り入れてくれたと感激し、ぜひ劇遊びとして役割を決めて筋書きどおりに展開させたいという誘惑に勝てないのではないだろうか。これは実習生でなくても、熱心な保育者の陥りやすい落とし穴と言えよう。落とし穴とは、遊びをより良く発展させようと「おせっかい」にな

るような援助をしたがることである。

保育のねらいを確認してみる

先にあげた砂場のひとこまは五月というこの時期の保育目標を十分かなえていたのではなからうか。つまり、

・気持ちのよい戸外でのびのびと過ごす。

(砂遊びがおもしろければ促されなくても外に出て遊ぶ)

・自分のやりたいことを見つけて楽しむ。

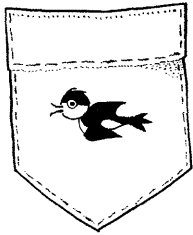
(物の性質を知る、性質に合わせた利用の仕方を工夫する、試行錯誤の途中でさまざまな発見をするなど)

・遊びへの共通の興味をもった子ども同士が出会う。

(遊びを通して相手の性格、要求を知り付き合
い方を学ぶ、新しい発想を取り入れ自分の世

界を広げる、いっしょにする楽しさとけんかを
をする悲しさ、くやしさも味わう)

いわゆる実習生の援助は子どもの年齢や時期によつては間違ひではないが、五月の保育のねらいと子どもの実態にふさわしいとは言いかねる。保育とはいつもその時の子どもの状態によつてねらいと方法を工夫することである。記録からは、先の場面の保育者は何の援助もしていないように見えるが、子どもの主体性を大切にし、子ども自身が経験し感じていることに共感しながら見守っていることがわかる。それが最良の援助であり、また、もっともむずかしい援助とも言えよう。ここでの保育者のねらいは、○○遊びという形をどう展開させ活動を盛り上げるかではなく、それぞれの子ども



が体験し感じていることがその子の成長にどうかわっているかを見極めることである。次の保育の計画はそれをもとにたてていく。Hがただ砂をもてあそんでいるように見えても、その間に砂の特性を、踏みしめる足を通し、握る手を通して堅さ、もろさ、温度、湿度などを感じ取り、これでは何ができるだろうと思ひめぐらせる大切な時になつていく。

次の段階では、乾いた砂は滑り落ちやすく、なかなか高く盛り上げられないことに気づき、何か方法はないかとあたりを見回す。これは積極的な探求の姿勢で、大人の世界でもおよそものごとの成功の鍵は先人の研究成果を活かすことと広く情報を求めて参考にするにあるように、Hは年長児の山作りの技法を学ぼうとしている。その年長児のやり方も代々先輩から受け継がれたものであろう。結果の成否よりも認めてやりたいのはそ

の姿勢である。同じように大きな山を作りたいと思いつながらHの様子を見ていたGが、協力を申し出るとHはすんなりと受け入れる。一人ではとても無理なことがわかってきたのと、同じ目的もった友達といっしょに遊べるのが嬉しかったのである。しかし、二人でおもしろがって水を運んだため山は田んぼようになってしまふ。それをこねまわすのも新しい経験で砂に水を混ぜると固まることを実感し、おにぎりだ、おだんごだといって遊びはじめる。

偶然できた状況を利用して別の遊びに移るのはこのころの子どもの特徴である。女の子たちがおにぎりのトッピングからケーキの飾り付けを連想してケーキ屋さんになったように、また、道が川になり、丸木橋をつけたことから「がらがらどん」ごっこを思いついたように。

「がらがらどん」ごっこが自然発生したことは見

過ごすには惜しい活動で、なんとかして筋書き通りに物語を進行させたいし、役割も分担させたい。また、昨日読んだ内容がどれだけ子どもの中に浸透しているかも確かめたいだろう。

しかし、HとGは、棒切れを橋に見立てたことで川は深くなり、山はいよいよ高く感じられるようになった。まるで昨日の「がらがらどん」のお話しの舞台のようだと思像が広がる。二人の思い入れがもつとも強いのが橋であるゆえに、橋の上と下でがらがらどんとトルとりのやりとりだけを繰り返して満足しているのだと思う。その気持ちに共感することが適切な援助を生む基盤になることをこの砂場遊びは物語っている。

(元松山東雲短期大学)

はれ!

ときどき
ときどき

その② * さとうひろこ *

さんぽ

五月のぼかぼかあたたかい日、三歳の子どもたちと幼稚園の庭に散歩に出た。外に出たかったのは私で、子どもたちは初め、それほど乗り気ではなかったのかもしれない。

連休が明けて、少しだけ幼稚園の生活が分かりかけてきたものの、まだ自分の意思でここに來ているわけではないようで、この日も、クラスの半分くらいの子どもたちが、私の周りに必死にしがみついていた。

みなさんでお団子みたいになりながら、靴を履き替えて外に出る。お団子からはみだしたF夫は、ずしっと重いカセットデッキを両腕で抱え、私たちの前を歩いている。彼の持つカセットデッキからは、みんなの大好きなトトロの「さんぽ」が流れてきた。

♪あるこーうあるこーう、わたしはげんきいー♪

お団子のまま、歌いながら歩き出す。あんまり元気がなかったお団子のひとりが、すーっと離れてF夫の後ろに並んで歩いた。

(よかったー。少し元気が出てきたみたい……)

♪さかみちートンネルうーくさあつぱらー♪

庭のトンネルを抜ける頃、突然F夫が声をあげた。

「(トトロと) おんなじだー!」

お団子はほぐれて、私のからだは、ふわっと軽くなった。広いお山のでっぺんに着くと、ほぐれたお団子たちが走り出した。

ぼかぼかやわらかい日差

しの中、幼稚園のお山に、たくさんのトトロ。もう会えないと思っていたかわいい妖精たちに、この日私は再会できた。(幼稚園勤務)



科学者の眼・芸術家の目

渡辺 純一

科学万能の現代にあつて、事実をありのままに観察することの大切さがややもすれば見失われているようです。芸術家の卓越した観察眼のお話をしましょう。

ブルキン工現象

大阪に本社のある紡績会社に勤めていた父は、関

西地方の社宅を転々とした後に、最後の勤務地となった浜松にマイホームを建て、家族ともども、大阪の箕面から引越しました。東海道新幹線が開通した二年後のことで、当時小学六年生だった私は、まるで、飛行機で隣の国に移り住むような気持ちを感じて覚えています。父は、南向きの洋間の前にベランダをこしらえて、藤の木を植え、藤棚

を作りました。初めて花が咲いた日曜日、庭仕事を
終えたあと、

「くたびれて宿借るころや藤の花」

という俳句を教えてくださいました。夕暮れの藤の花の
美しさを詠んだ松尾芭蕉の句は、貞享五年、大和行
脚のときの作とされています。西暦では、一六八
八年。手作りの藤棚に満足げな父の笑顔が、春のも
のうい気分とともに記憶の片隅に残りました。

十年後、私は大学の医学部で生理学の授業を受講
していました。いつもは退屈極まりない講義です
が、その日は、チェコ人の講師が授業を行うという
ので我々は少なからず、緊張しておりました。日本
語でも難解な生理学を英語で教えるというのですか
ら。チェコで最も有名な学者プルキンエの名前は、
日本語の発音が英語（パーキンジェ）よりもはるか
に原語に近いのでとてもうれしいと話されたことが
記憶に残っています。授業は、おそらく小脳のプル

キンエ細胞についてであったと思いますが、同時
に、プルキンエの法則についても触られました。

薄暗いところでは明るい場所に比べて、人の視力は
青色により敏感になるという現象です。突然、芭蕉
の俳句を思い出しました。夕暮れの薄明には、藤の
花の青色が鮮やかに浮かび上がることを芭蕉は芸術
家の目で捉えていたのです。現在、この事実は発見
者の名前を取ってプルキンエ現象と呼ばれ、色彩に
携わる人達の間では常識になっています。芭蕉は、
その法則を自然の美として理解し、表現していたの
です。物を見るときはこういうことではないでしょ
うか。

バビンスキー反射

保育の専門家である皆さんには、周知の事実で
しょう。新生児期にのみ見られて、成長とともに消
失する「原始神経反射」があります。赤ちゃんが、

唇に触れた物を吸おうとする吸嘔反射きゅうてつ、びっくりしたり、後ろ向けに倒されると両手を広げて抱きつく姿勢を取るモロー反射などが有名です。これらの反射が見られない新生児では、神経の異常が疑われます。一方、成長後も原始反射が消失しない場合、同様に発達障害の兆候とされます。バビンスキー反射も原始反射の一種です。新生児の足の裏の外側を、かかとから小指の方向に、とがった物でこすると、足の親指が反対に足の甲の方向にそり上がります。この反射は、生後六ヶ月くらいで消失し、成人では、同様の刺激で、足指がゆっくりと足裏の方向に折れ曲がるようになります。ところが、脳障害による麻痺患者では、新生児と同じ反応が認められ、これをバビンスキー反応陽性と呼んでいます。

十九世紀の後半、フランス人医師 Joseph Babinski が、この事実を発見して、この反射は、一躍有名になりました。当時、ヨーロッパで流行していたヒス

テリーにより麻痺と脳卒中による麻痺を鑑別するのに非常に有用であったため、たちまち全世界の医師が診察に利用するようになりました。ヒステリーの麻痺では、神経系には異常がないので、正常人と同じ反応がでてしまうのです。

しかし、さきに述べたように乳幼児では、正常でも、そりあがり反応が見られます。脳神経の未発達のためと考えられています。

ところで、聖母マリアとキリストの像のなかには、よく見ると、キリストのあしゆびが背屈しているものがあります。おしりをささえている母の手が





刺激になってバビンスキー反射を誘発していると考えられています。ルネサンス以降の聖母子像では、

約二割にあしゆびの背屈が見られると言います。メムリンク、レオナルドダビンチ、ラファエロ、ボツチチェリ、名だたる画伯の描く聖母子像では、確かにそのようななっています。実際に赤ちゃんをモデルにしたのでなければ描けない事実ですが、おそらく、この事実は、当時の一流画家の常識になっていたのだろうと思われれます。そう都合よくバビンスキー反射が出現するとも思われなからです。

病気との関係を明らかにしたのは、バビンスキー教授の偉業です。我々内科医は、その恩恵により、脳梗塞・脳出血の診断を行っています。

以上は、神経内科学の授業で豊倉教授から直接伺ったことです。このような指摘は、欧米にもないらしく、教授はライフワークとして前述の調査に取り組んでおられました。ところで、バビンスキー教

授は、はたして、聖母子像の親指の反射をご存じだったのでしょうか？

ものを見るときには、網膜の細胞が光を感知して、神経の信号に変換し、視神経を通じて、大脳の後頭部の視覚野に伝えていきます。しかし、それだけが、視力ではありません。視覚野から、さらに、大脳の高位の統合野で解釈されて初めて「見える」のです。

脳の成長期には、眼も、脳も、そして視覚も急速に成長します。同時に認知力も飛躍的に成長します。幼子たちには、日々、自然の美しい色・光を眺め、大気のそよぎを肌を感じながら、豊かな目・眼を育ててもらいたいものです。春の夕暮れの藤の花の美しさ、沈む夕陽の輝きも、成長の糧に他なりません。

(東京大学医学科学研究所)

瞬 き

尾形 節子

「専門的に保育にかかわろう」と漠然と思い始めたのは、大学に入ってからだと思う。それまで子どもとして育ち、育てられてきた私が、育てる側に回ろうとした時、非常に意識したのは「見ること」だった。ただ楽しく子どもとすごす幸せではなく、願いをもって子どもと在る喜びを選んだ。そのために、子どものありのままの姿を見、その背景を見、自分

自身を見ること、それらに莫大なエネルギーを注いだ。そして、「目を見開こう」とするあまり、「見る目」のない自分に愕然とした。「見る目」があると思う人への素直な賞賛とどうしようもない焦りが同時にあった。そして、「もっと見なければ」という思いに支配された。

ある時、ひとりの保護者が「子どもが幼稚園にいる間はホッとします。(自分の子どもの様子を)見ないですむから。家で、部屋の扉を閉めて、ヘッドホーンをして、ピアノを弾きまくる時があるんです」と言った。とっさに頭に浮かんだ映像は、我が子の存在を否定している親の姿であり、否定されている子どもの姿であった。「子どもから目をそらさない強さが欲しい」と願わずにはいられなかった。しかし、言わなかった。その人が身を削るようになって子育てをしていることを知っていたから、言えなかった。

その子どもには、「もしかしたら何らかの課題を抱えているのではないか」と育てる側の人間に思わせる「何か」があった。「簡潔にポイントのみを言う」「言葉ではなくイラストを描き合って会話をする」等の意図的なかかわり方が有効で、マンツーマンでつきあう必要性を強く実感した。しかし、園内

に余剰人員はなく、教職員一丸となつての連携で乗り切るのが精一杯であった。その子の抱える「何か」を知るために、関連領域の大学教授に意見を求めたり、参観者(幼稚園・保育園・養護学校教師)とのかかわりを見たり、園内研究で話し合ったり、と思いつく限り試みた。保護者も私自身も、診断的な結果を必要としていた。しかし、それは得られなかった。一保育者として三十数名の子ども達という学級集団の中でその子との日々を重ねる決意を新たにするばかりであった。

担任としてその子どもと向き合うなかで「他の子どもに対する場合よりも明確に喜怒哀楽を表す方が伝わりやすい」ということがはつきりしました頃、私の疲労はピークになった。その子にわかりやすい表現は、他の子どもには明確すぎるのである。「個に応じる」というのは、言葉にするときれいだが、現実的にはどろどろしている。「先生は、あの子の

方がかわいいの？（言い方がとても優しいよ）」「あの子は分からない子なの？（とても強い言い方だもの）」という子どもの心の中にわき起さる様々な問いに、繊細に対応していかなくてはならない。その問いは、子どもゆえに言葉では明確に表現されないことも多い。保育者としてどれだけ「目」を見開いていられるのか、なんだか自分の精神力次第な感じがした。

そんな時、他の教職員がその子どもと穏やかな時間をすごしてくれているとホッとする自分に気付いた。保育者を志した時の私であったなら、そういう自分を「後ろ向き」と評価したであろう。しかしその時、その子どもに対する教職員の理解は深く温かく、私は安心して他の子どもとの時間をすごすことができた。直接その子とかかわらない時間が、その子とかかわりたいと思う気持ちを育んだ。そしてやっと、「見ないですむから」「扉を開けて」と言っ

た保護者の発言の真意に思い至った。「見ないこと」は、「決してその存在を否定しない。ありのままの子を受け入れて、ともに生きていく」という保護者の決意の表れなのだ。

真っ直ぐにその子を見るためには見ない時間も必要で、保育の「目」を開くためにも、その「目」は閉じる必要があるのだ。そんな当たり前のことに、長い時間をかけて気が付いた。普段目を使う時、人は皆当たり前のように瞬きをする。瞬きをして目を潤している。保育の「目」も見開いているだけではダメなのだ。「目」を開いて、「目」を閉じて、「目」を開いて、そういう繰り返しのなかで、見えている部分と見えていない部分があることを自覚したい。「すべてを見ることが保育の答えではない」と実感することが大切なのだと思う。子どもを自分ひとりですてようと気負わず、誰かにゆだねること。それを「前向き」と思えるような信頼関係があること。

自分の知らない時をすごした子どもと新たな気持ちで出会うこと。当たり前のことなのだが、それらは一番大切なことなのだと思わなくてはならない。

出会うために、「目」を閉じたい。大切な人との一瞬一瞬、そこで、「会いたくてたまらない」と思っ「目」を開ける自分で在りたいと願う。

【追記】

最終的に私達（保護者と私）は、「その子どもについて）ADHDなのではないか」という判断に至り、専門病院に診断を仰いだ。受診を判断した時、その子の保護者は「これでやっと（育てにくい）理



由がはっきり分かると思うとホッとします。もう、

（育て方に）迷わなくていいと思うと嬉しい」と言い、私も心の中でそれに同意していた。その子の「何か」について、「症例に従って、迷わずかわってあげばいいんです」という臨床的な保証が欲しかったのだと思う。しかし、結果は「ADHDではない」というものであった。結局保証は得られなかったわけだが、私達の気持ちは意外なほどすっきりし、「このまま一日一日を積み重ねていこう」と再び思った。今にして思えば、結果がどうであれその子としっかり向き合っていくという毎日に変わりはなかったのだ。

「何か」に迷って「目」を閉じて、「それを知りたい」と思っ「目」を開けて、「ありのままの子を受け入れて、ともに生きていく」という決意を再確認する。それを繰り返す日々を重ねているのかもしれない。

（西東京市在住）

冬芽の涙

高柳 芳恵

春には新緑、秋には紅葉とその美しさがよく話題にのぼりますが、すっかり葉を落とした冬の木に興味を持つ人は少ないでしょう。

しかし、冬の木の前には、さまざまな表情をもった「顔」があることに気がついたら、木を見る眼がきつと変わるのではないのでしょうか。写真のように、それはそれは小さなヒツジやサルやコアラなどがひそんでいるのですから。

そもそもこの顔のように見える部分は、葉っぱがついていたところ（葉痕）であり、目や口に見える部分は、根から吸い上げられた水や葉でつくられた養分が行き来していたところ（維管束）です。そして、この「顔」の上に帽子をかぶったように見えるものが、木の芽の冬姿、冬芽です。人が目で見て考え口から食べて成長しているのと同じように、木も口や目を持ち、同じ役目を果たしていることを考え



▲オニブルミの冬芽



▲ゴシュユの冬芽

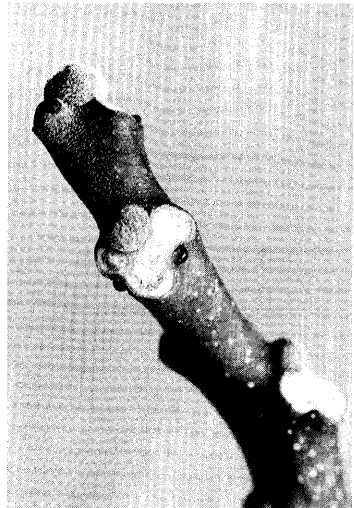


▲チャンチンの冬芽

ると面白いなあと思います。そして、“顔”の形は、木の種類によって決まっているので、顔を見れば、何の木かがすぐわかります。しかしよく見ると、同じ木でもその顔の表情は微妙に違ってきます。内気に見えたり、いたずらそうに見えたり、いじわるそうに見えたり、ふとつていたり……、おもわずふきだしてしまいます。

私は、冬の間いろいろな“顔”探しをし、春が近くなると冬芽がふくらんでかわいい葉や花があらわれる様子を見るのを愉しみにしています。

ある年の三月初旬のことでした。数本の小枝をコップにさして窓辺に置いておいたのですが、日の光を受けてキラリと輝いているのに気がつきました。不思議に思っ近づいてみると、それはセンダンという木の小枝についた小さな二つの水滴でした。水滴は、葉痕のわきのくぼんだところについて



▲センダンの葉痕のくぼみからでてきた“なみだ”

いて、ベレー帽をかぶった子猿が涙を浮かべているように見えるではありませんか？ 思わぬ発見に見とれていた私ですが、なぜそこに水滴が付いているのか不思議でした。

「昨日見たときは、なかった。偶然ついたとは考えられないなあ」

次の日も、また次の日も水滴はついたままでした。数日後、センダンの小枝についていた六個の冬

芽すべてに、涙を浮かべる子猿がいました。

「この涙は、コップから吸い上げられた水が、勢い余ってしみだしてきたんだ！」

私はこの時、前の年の三月にミズキという大木の木肌を耳をくつつけ、木の内部を上がっていく水の音を聞いたことを思い出しました。「コポコポ、シャー」という音をたて、大量の水が根からすいあげられていく様子が想像できたのです。そして、枝先の細い枝を手折ると、ポトツ、ポトツとその水があふれてきました。木から外側を見ると、まだ何の変化もあらわれていないように見える早春、すでに木の内部では、エネルギーがみなぎりはじめていることを実感した出来事でした。

二十センチもないセンダンのその小枝は、その後コップのなかで、冬芽をふくらませ、ついにかわいい葉っぱと花のつぼみを出しました。

ところで、センダンという木は、別名 棟（アフチ）ともいい、薄紫色の小さな花を房状にたくさんつけます。初夏に咲く花として、童謡「夏は来ぬ」（佐々木信綱作）の歌詞の四番にでてきます。

一 うの花のおう垣根に

時鳥（ホトトギス） 早もきなきて

忍音もらす 夏は来ぬ

四 棟（アフチ）散る川辺の宿に

門遠く 水鶏（クイナ）声して

夕月涼しき 夏は来ぬ

「夏は来ぬ」は、五番までありますが、初夏の田園風景を見事に表現しています。うの花（ウツギ）、ホトトギス、早乙女、水鶏（クイナ）、ホタル、五月闇……。

田舎で子ども時代を過ごした私には懐かしい風景



▲センダンの葉と花のつぼみがでてきたところ

です。しかし、一つ一つ姿を消していき、今ではそんな風景を目にすることがなくなってきました。センダンが流した涙、本当は何か言いたかったのではないのでしょうか。

（ナチュラリスト）

見る力

北島 尚志

五、六歳児対象（三十人あるいは親子三十組）の劇遊び「魔法の森の招待状」という作品があります。

『魔法の森から招待状を持ってきた魔法使いと共に、魔法の森で一日遊ぼうということになりました。スカーフで魔法使いに変身！いざ出発！見えないうちにまたがり空を飛ぶ子ども達、魔法の森で楽しく遊んでいるところにマーオー一族がやって来てスープにしようと襲い掛かってきます。さあ子ども達は知恵と勇気と願う力でマーオーに挑むのです。』

共通のストーリーを提示し共に楽しむ大人として私達は彼らの前に現れます。しかし、何せ初対面。

・遠巻きに見てお母さんの足に絡み付く子。
・「魔法使い見たことあるよ、早くいききたいな」という積極派。

・「つままない！帰る」と不安がっている子。
・「太ってるねおじさん、かっこわるーい」「魔法使ってよ」と茶化す子。
・舞台にある布で、作った森の中に隠れている子。

まさにバラバラのその気と向き合います。

私達はまず、そのバラバラのその気を否定せず、受け止め、それを引きうけて進んでいこうとします。同時に見えているものを疑います。そこからだけでは見えてこない何かを見るために見えてる姿の後ろにある心の動きに思いを馳せていこうとします。バラバラのその気は、箒に乗って空を飛ぶ場面でも勝手気ままです。何しろ映画のような本物のかつこい箒などありません。ただ一人一人のイメージの力を信じるしかないのです。

- ・しっかりとみえない箒をつかもうとする子。
- ・何本もの箒を持つ子。
- ・はじめは持つものの飛び出したら（走り出したら）関係なし。ひたすら暴走。
- ・ゆったり飛ぶ（走る）子。
- ・怖くて飛べない子。
- ・友達をじっとみている子。

二、三人乗りしている子。

・奇声をあげぶつかってくる子など。

空は新米魔法使いで混みあいます。そこには正しい乗り方の指導もないし、列からはみ出さないようにと注意される事もあります。自分が決めた自分のスタイルを自分のペースで行っているのです。しかし互いの姿を見て笑いあったり声を掛け合ったり、その気のエネルギーが流れ始め、伝わり始め、確かに風が吹いてくるのです。やがて魔法の森の入り口という目的に向かって同じものを見始めます。

さて、魔法の森の入り口に入ったものの、その先に進むには、森の番人に魔法の力を見せなくてはなりません。番人から出されるテーマは、

「動物になれ」

「こわいものになれ」

「おいしいものになれ」

これらのテーマに沿って自分達の身体を使って表現

するのです。

動物になるためにどうするか？大人と子ども別々になり、グルーブごとの魔法の作戦会議が開かれます。大人グルーブはゾウに決まり、皆で身体を作り耳と長い鼻をつけたゾウの形が出来上がります。もちろんすぐわかります。

一方子どもグルーブもゾウをしました。ある子が二人で「僕達ゾウになる！」と言います、ゾウになって（つもり）歩きます。すると他の子が「僕しっぽになる！」といって、ゾウの子の後ろについて身体全身でしっぽそのものになっています。

じゃあ私は「ぞうさんが食べるリンゴになる、食べてね」といって座ります。こうしてリンゴを食べるゾウになるのです。ゾウかどうかは一見ではわからないのですが動きをよく見てみるとだんだん見えてくるのです。

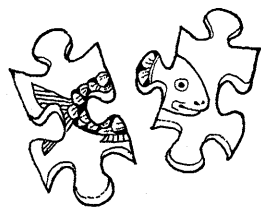
他の大人グルーブは蛇です。一人一人つながって

とぐるを巻いたりしてこれもすぐわかります。もう一つの子どもグルーブはひたすら走り回っています。良く見ると前で走ってる子は飛び跳ね、後にいる子は四つんばいでも

のすごいスピードで走っています。それはチーターがウサギをつかまえるシーンです。

「おいしいもの」のテーマでも、モモと決まるとモモの形を作ると思いきや桃太郎の話しをすることになり桃太郎誕生までを行ったり、スイカとなれば海辺ですいか割り大会をやったり、又一人一人が肉になったつもり、野菜になったつもりで、ワクの中に入って身体をクネクネゆすって出て行くのを繰り返しています。何とシャブシャブでした。

大人は見えている姿のある形をなぞろうとします、いわば「静」として見えています。しかし子ども



らは「動」として見ているのです。一見は確かになんだかわからないのだけれど、形としての見せ方は上手ではないのだけれど、そこに生きていくというか、存在していて、彼らの見る力の一つ一つ物語があるのです。従ってそれをどう見るのか、その物語を見る力が私達に問われてきます。先入観や思い込みを捨てまっさらになって見なくてはなりません。そして、私たちがどう見えるかが「力」になるためには次のことが必要になってくるのだと思います。

① 「それでは見えない」と形をなぞらせ、「鼻は長いよね。やりたい人?」「大きな耳はだれがやる?」と指導者の答えに誘導しないこと。

② 一人一人違うことを認めそれを楽しもうとすること。

③ 一人一人が自分のおもしろさに向かっていればその気は自らが動かしていくことを信じていること。

④ さらにその違いを受け入れ、テーマである例え

ば「おいしいもの」に向かってイメージが積み重なるような、提案をしていくこと。

現れる姿から現われてこない姿を見ていく怖くて素敵な時間です。

お母さんから離れられなかった子や、茶化してた子など彼らのバラバラのその気はやがて自らの力で大きくなつていきます。そしてその気を動かしていく大きなエネルギーは大人の「見る力」だということとを毎回痛感します。見る力がないのに「今の子どもはしらけてて……」と言つてはならないと思ひます。

さて、番人に認められた魔法使い達はいよいよ魔法の森の奥へ進んで行きます。このつづきはまたの機会に……。

(あそび・劇・表現活動センター アタフ・バーバン)

退職園長による子育て塾 (3)

親も楽しむ

戎 喜久恵

流しそうめん

「にじサタデー」で子どもたちが一番好きなのは散歩です。小道を歩いたり、休耕田に入ったり、裏山に登ったり、小川をのぞいたり、野原に座り込んだりと時間が経つのを忘れてしまいます。そして、散歩に負けず期待して楽しみにしているのが「流しそ

うめん」です。「流しそうめん」は、四月のタケノコ掘りがきっかけではじまりました。タケノコ掘りに満足した子どもたちは親竹も切って持って帰りたいと言い出したのです。少し大きな子どもたちが竹挽きのこぎりを持って挑戦しました。地主の佐藤さんと平尾のおじさんはアドバイスをしながら根気よくつきあってくださいました。木片を切ったことは

ある子どもたちですが、木を切るように上手くはいきません。最後は佐藤さんに助けられて目的を果たしました。倒してみると、生えているときには想像もしなかった大きさです。「かくや姫がいるかも……」とお話の世界に遊ぶ子、「そうめん流しが出る」「したい。やろう、やろう」と提案する子、「いやあ、楽しそう」「懐かしい」と喜ぶお母さんたち、こんな状況で流しそうめんははじまったのです。長い竹を運び出す。枝を払う、竹を真二つに割る、節を取る、サンドペーパーで切り口を磨くなどの一連の作業は初体験ばかり、「上手くそうめんが流れる樋」を目指して作業を進めます。竹の性質を活かした枝打ち、竹割り、節取りや、削る、磨くなど目的にあったさまざまな用具や道具を使いながら「人間って、すごいね。賢いんだね」と感心するこ
としきりです。



▲ “ちょっと てれるよナー” 準備も片づけも自分らで

さて、このようにしてはじまった「流しそうめん」も今年で三年目を迎えました。

経験を積んだスタッフや先輩ママは経験を生かして手際よく樋に角度をつけ、水を流して試してみます。初年度の試行錯誤の成果が活きています。そして参加者もこんな流しそうめんをと一味加えて今年の流しそうめんを生み出していきます。スタッフが準備した薬味のほかに「私のうちは、こんなものも入れると喜ぶのです」「うちは……、私が好きなので……」と持ち込まれて加わったりもします。「あら、おいしい。早速やってみよう」と情報交換をしています。大学生は薄焼き卵のできばえに歓声を上げ、子どもたちもシヨウガをおろしたり、包丁をもってネギ・卵・わかめ・かまぼこを切ったり思い思いに参加してきます。昨年よりうまくなって「拍子木タマゴ」から「錦糸タマゴ」へと上達している子もいます。「すごい。おいしそうに出来たね」と

認めてもらった子は、隣の「乱切りタマゴ」の子に「でも、それもおいしいから、いいのよ」と、昨年、伊勢先生に声をかけてもらったのと同じことばで励ましています。自分がしたことを大切に尊重され心地よい経験をした子は、自分以外の人を心地よくしていく力を内に育てていっているようであり、くくなります。

そうめんを流しはじめると箸を持ってチャレンジです。タイミングを計って挟もうとする子、じっと箸を構えてそうめんがかかるのを待つ子、箸にかかった一本のそうめんを大事そうに口に入れる子、母親に食べさせて喜ぶ子、たらふく食べる子、とれた量を競っている子など実にさまざまの楽しみ方をしています。流すことが面白く工夫をする子も現れます。みんな生き生きとして、一人一人違ったかわり方をしています。一人一人が流しそうめんで見たいことを表現しているのです。この日、食べ



▲それぞれの参加の仕方です……

るそうめんは大人標準量の約一、五倍を軽く超えて
しました。

『レインボー通信』に寄せられた「流しそうめん」
に参加しての感想を紹介します。

「ちよつと」と「ありがたい」と「せっかく」

「ちよつと草でも抜かせてもらおう」とおばあちゃ
んが始められた庭の草抜き。

「あら、あら、ありがとうございます。雨が降った
よらく生えますねえ」おばあちゃんとお話をしなが
ら先生がちよつとかかわると……不思議、不思議、
子どもたちもお母さん達もお父さんもお姉さんも、
みんないつしか草むしり。「すごおい」「あつ。みみ
ず」「一緒に引つ張ろう」なんだか楽しく、いい気
持ち。「せっかく、みんながきれいにしてくれたか
ら、お花でも植えようね」お宅に帰りケイトウの



▲ちょっと草でもとりましょか 草とりもたのしい

花の苗を持ってきてくださり、プールの周りや花壇に植えました。伊勢先生や赤澤先生やお母さんたちのところから卵焼きやそうめんの茹だったおいしい匂いがしてきたのはそのころでした。「ちょっと」した心配りや共感、「ありがたい」と思える感謝の気持ち、「せっかく」だから大切に作る、無駄にしない、心を砕く。これって子育ての極意？

「わくわくしながら親も楽しむ」

夏本番間近、六月のじサタデーは、とても楽しみにしていた「流しそうめん」。私の子どもの頃は夏になるとあちこちで行われていた「流しそうめん」も最近ではあまり見かけられなくなり寂しく思っていたので、子どもと共に大はしゃぎしながら楽しませていただきました。

子どもは、もちろん初めての体験だったので大喜び。流れてくるそうめんをGETするのに、すごく

真剣なまなざしで、お箸に止まったそうめんをすくい上げた時の顔は、何ともいえない満足顔。気がつくとおそうめんをGETするのに一生懸命で、器の中には山盛りのおそうめんが……（ほとんど、それを食べていたのは、母の私でした）。

子ども曰く、「おそうめんつりつって楽しいね。

ママ!」。なんだか夜店の金魚すくいか風船つりの感覚で楽しんでいる我が娘に、夏のひととき、気持ちもお腹も幸せいっぱいになりました。

先月号のレインボー通信に、『にじサタ』に来るとなんだか心が落ち着くのはどうして……?』というコメントがありました。実は私もまさしく同じことを感じていました。本当にどうして『にじサタ』来到ると、心が落ち着くのでしょうか。

私なりに色々考えてみたのですが、私達親子の場合合は子どもが楽しいのは勿論の事ですが、やはり母

の私も毎回一緒になって、ワクワクしながら、楽しませて頂いている事が大きいのでは……!と思うのです。親が楽しい時って、それだけ子どもに対してもゆとりを持って接する事が出来るのでは?と考えるので、子どもの方も安心していられるのかな?なんて勝手に思ったりしているのです。よく三歳位までの子どもは、「母親を通して物事も見ている」と聞くのですが、母親が楽しい事って、子どもにとっても楽しいものなんだあ!って、(全てがそうではないのかもしれませんが)『にじサタ』に参加する度に、実感しています。『にじサタ』は、今、私たち親子の住んでいる周りでは決して触れる事の出来ない素晴らしい環境のもと、なかなか体験出来ないような色々な事にチャレンジさせて頂けるほか、子どもにとっては異年齢のお友だちとの触れ合いを通じて、刺激を受け、子どもたち同士で学び合っていると。刺戟にも、にじサタの素晴らしさを感じます。

時には大人に教えてもらおうよりも、本を読むよりも、自分自身が体験して心に受けた感動は、いつまでも深く残り、自らを成長させてくれるのではないかと思うのですが……。 (以下略) (Mママ)

「かけがえのない時間」

うわさは以前から聞いていたけれど一人でいく勇気がなく友人に連れて行ってもらったのは今年の夏でした。(略) 中へはいると前回も好評だったという流しそうめんの準備がもう始まっていた。親から指示されることもなく、娘は錦糸卵を切り、息子はサッカーを始めた。準備ができ先生がそうめんを流し始めると初体験。青竹を流れるそうめんつかみに夢中になっている。そうめんを流す青竹も手作りで、遊びも環境もごく自然。(略) 週休二日制となり時間をもてあましているお子様対象に作られた人工的空間やイベント(含む塾や稽古)とは全く相反



▲流しそうめんの準備をする横ではサッカーも

した伝承遊びは私たち親子をすぐとりこにした。家族で自然を求めて行動しようと考えてはいるけれど、行動半径も狭く限られたものになってしまふ。

しかし、多くの先輩の豊かな知識と経験に裏打ちされ今の子どもたちに伝えたいという熱意で築かれた環境は、我々の心の窓を素直に開かせる。そして、大勢の人と幸せなひとときを過ごせたことで豊かな気持ちになれ、さらに感謝の気持ちを育ててくれる。
(ミツキーママ)

子どもと過ごすときに大切にしていること

『にじサタ』では、「こうしななければならない」はありません。子どもの「私は、こうしたい」を大事にしています。こうしたいと思ってもうまくいかないことはいっぱいあります。うまくいかないときに子どもは考えます。それでもうまくいかないときは、スタッフや親が手助けをします。そうすること

で、子どもは自分に来ることと出来ないことがあ
ることを学びます。自分に来ないことが出来る他
者に感謝をしたり、憧れたり、尊敬したりすること
が出来ると考えています。そこで、「あせらないで、
よく見て交わる」ように話し合っています。子ども
が手助けを求めないのに先走って手助けをすること
は子どもにとっていい経験にならないのです。ま
た、「ああさせたい。こうしななければ」では今を充
実して過ごせないばかりか子どもも親も楽しめない
からです。

(神戸女子大学)

「漠然とした迷い」に向き合おうと

金井 彩

自らの保育を振り返る時、「こうすれば良かった」と答えがわかる反省はスラスラとでる。難しいのが「こうしたから駄目だった、でも、どうすれば良かったかわからない」という反省。それでも、駄目だったと分かっているのです、別の方法を、あれこれと考えることができます。私にとって一番やっかいなのが、「これでいいのだろうか」というもやもやした迷い。更に悪いことに、漠

然としているので、なかなか表面に現れず、問題に向き合うことすらできない。心の奥の方に流れる迷いを引きずりながら保育を続け、いつのまにか、気にならなくなっていることもある。何に迷ったのかも、なぜ解決したかも明らかにしないまま終わることの方が多い。そして、同じような場面でまた迷いながら保育をしているように思う。

今回とりあげるA子への援助も、漠然と迷いを抱えて
いることが多かった。A子の記録を振り返り、どこで自
分の迷いに向き合えば良かったか、援助の方向性を決め
るポイントが、どこかにあったのではないかと考えてみた
い。

A子(四歳新入児)は、入園当初から、言葉・動きが
殆どなく、好きな遊びを自分から選択することがなかつ
た。保護者と離れることは嫌がらず、朝の支度などする
べきことはしっかりとすませることができると話しかけ
ても応えはなく、泣いたり怒ったりというマイナスの表
現すらないので、心の動きが全く読めなかった。

(◇は私の日々の記録)

◇四月十六日 A子 製作コーナーに座ることもなく、
立ったまま周囲を見ている。笑顔なし。園庭に誘う
と、うなずく。私の手を取って外に出る。私が差し出

すと、泥の型を返すことを二、三回する。私が何かの
拍子に手を離しても、私の手を要求せず、その場で
突っ立って固まってしまう。声もださない。砂、泥に
触れるのは、平気である。片付けの時、洗いやさん
(水洗い)を黙々としている。集まりの時には、皆と
一緒にカエルになってピョンピョン跳ねる。特に笑顔
もないが、体は動き出している。

この頃、副園長も「目がパチパチつて瞬きする時はイ
エスの意味みたいよ」など、アドバイスをくれる。色々
に働きかけながら「A子の感情表現を探る」という方向
性がはつきりしていた。

◇四月二十一日 全体の記録より：中央テラスに設定し
た巧技台・滑り台の所で、私が踏切を作り子ども達に
インタビュウをしてから通す。子ども達も照れたりし
ながら応え、とても嬉しそうに繰り返す。教師とつな
がる遊びとして有効に思う。A子：私が巧技台に行っ

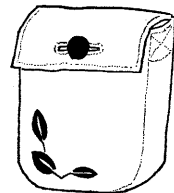
ている間、保育室で友達の動きを見ていた。私と一緒に動かせないのだから、私が中央テラスに行く時にA子も連れていけばよかった。

一人一人が教師と関わって楽しむ遊びが、A子にとっても楽しいものだろうと予想している。このような遊びに積極的に誘い、教師と関わって遊ぶ楽しさを十分味わえることが、A子にとって必要だと明確になっている。実態は、そうとわかっていながらA子とじっくりつきあえない日が続くのだが。

◇五月二日 私と外へ。時々手を離すが、そこで固まって立っているのではなく、私を追いかけてきた。進歩？自分なりに選択をして動き出そうとしている？

私が手を離すとついでこようとすするA子の姿を「進歩？」と記録している。私と一緒にいたい気持ちの表れと捉えると、A子が自ら動き出した「進歩」と読みとっていいだろう。逆に、私がいないと不安で、その場所に

いられなくなったのだと解釈すると「後退」とも考えられる。A子と一緒にいて、そのどちらと捉えるか判断のつかない感覚が「？」と記させたのだろうか。しかし、



どちらにしても、A子の動きを「担任といたいという選択」として、ありのまま受け止めていけば、私は「A子と私の遊び」を充実させようと気持ちを固められたはずである。しかし、私は、自分の「？」に向き合えなかった。A子が私についてくるようになり、何かメッセージを感じるが、他の子や遊びが気になって付き合いきれない……そんなジレンマが、判断をさせた「？」に含まれているように思う。

◇五月二十三日 私と一緒にいるが、気持ちは園庭に向いているようだ。(中略)自分から、色水のほうへいく。M子が「何？」とのつてきてくれたので、A子に

「やり方教えてあげて」というと、M子を気にしながら花の方へ向かう。(中略)、M子とA子が手をつないでパンジーの方へ向かっている。A子も笑顔がでている。きっとM子の方から手をつないだのだろう。昨日のことも覚えていて、「いれものほしい」など、たくさん要求した。

◇五月三十日 絵の具を一通りすると、次へのきっかけが見当たらない。私もつきあえずにいますと、色水を始めた子と一緒に動いていたり、草花をじっとみていたり、地面に絵を描いていたり、と自分の興味に体が動き出している様子。午後はアスレチック・鬼ごっこことやるが決まっています分かりますことあるからか、「行ってきたいいよ」と声をかけると、動き出す。午後のかごめかごめをしている場面では、「だれだ?」と言えたとのこと(他教師の報告)。歌を歌うときも、大きな口を開けて気持ちよさそうに歌っている。好きな遊び、ごっこ遊びの中で、友達とつながるよう

に、次の段階を探りたい。

体の硬さが抜けてきたこと、歌を気持ちよさそうに歌えること、鬼ごっこやアスレチックを自ら選択し、教師や友達と同じ動きを十分楽しんでいること、友達に誘われて表情が和らいでいること……A子が自ら動き出し充実したこの時期に、なぜ「次の段階を探りたい」のだろうか?と、自分の記録ながら思わずにいられない。実際、私が行ったことは、行く先々の遊びにA子を仲間入りさせようとするものだった。とにかくどこかに入って遊んでほしい、という思いだけが先行していた。「次の段階を探る」とわかったつもりにして、A子の実態と自らの漠然とした不安から目をそらし、A子への援助の方向性はここで失われてしまったように感じる。

◇六月十三日(略)遊びの中では、私の服もってついて回る。ちようちよごっこを見ると一番表情が緩むが、私が誘うと、首を横にふる。私について回るの

で、自分で入りたいと思う前に動いてしまうことが多いだろう。

好きな遊びの中では、私の服を持ってついて回るだけで一日がすぎてしまうようになった。この頃から、「私が動くからまずいのでは」という思いがはつきりしている。「今のA子は充実していない」と意識して向き合い出した。

◇六月二十四日 私について動く。病院ごっこを見ている時、表情が柔らかい。道具を渡してみるが、首を横に振る。思いをだせるタイミングがつかめない原因は、私が動くと一緒にA子も動いてしまうことだろう。A子が動き出すまで、私も動かないという覚悟を決めた一日が必要なのではないか。

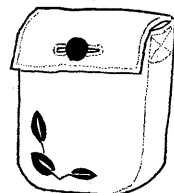
ようやく私の覚悟が、記録の中ではつきり書き出された。実際は、私が先に動くのだが、「あっちに行くね、A子ちゃんも行く?」「うん」というやりとりを重ね、

A子が選択したように動くという形をとった。

◇七月八日 私とH子が庭に机をだし、準備し始めたままごとに

A子が入る。私が抜けても留まり、おしゃべりしながら続けている。(中略) Y子がびっくりしたように報告しにくる。「A子ちゃん、話したよ!」喜んで女の子達を取り囲んで話しかけるのに、照れたように笑いながらも困っている様子はない。午前中ずっと、そこで泥料理を作ったり、食べたりしながらすすります。私のところには、「いす(欲しい)」など、いつもと変わらない小さな遠慮気味な声で話す。

突然、友達と会話をしながら遊び出したので、周囲も私も驚いた。そのように始まるとは予想できなかった。本当に嬉しい反面、A子の変化が全く読めないでいたことも突きつけられた。



〈A子のその後〉 期待して始まった二学期だったが、自分からしたい遊びが見つけられない日の方が多かった。一方で、楽しい時には、自然に、その気持ちが動きや表情で表れていた。そんな姿に支えられて、「これだけの表現ができるようになったA子。もっと変わりたいというメッセージは、はっきりわかる形でなされるだろう、あせらずに待とう」と思っていた。様々な関わり方を試し援助を探りながらも、私の不安でA子をひっぱらないようにしよう、ということだけははっきりしていた。しかし、A子からの思いや願いを確実に受け取った実感のないまま、二学期最後にA子の転園が決まった。いたらなかった援助に今でも心残がある。

〈振り返りを通して〉 その子の充実感を感じ取れない時や、思いや願いがつかみきれない時に、私は自分の保育に漠然と迷いを感じている。そういう、記録に「？」

とあっても、踏みとどまって迷いや不安の原因を考えようとはしていない。あるいは、わかったつもりにして、消えない不安や迷いからは目をそらしている。これらのことが、振り返りを通して、私の癖として感じたことがある。

それならば、私が漠然と不安や迷いを感じたり、「？」を使いたくなった時こそ、自分の保育を丁寧に見直し、意識化する時期がきていると捉えれば良いのではないか。何か子どもからのメッセージを受け取っているのではないだろうか、どの場面の、どの姿が気になっているのか？じつくりと付き合いたい子に時間を割けないインマが不安を作っているのではないか？……もし次があるならば、A子のメッセージを受け取るチャンスを逃さないように。

(東京学芸大学教育学部附属幼稚園小金井園舎)

編 集 後 記

園庭の子どもたちにお帰りの時間が近いことを知らせ、保育室に戻った私は途方に暮れました。クレヨンや紙類、おまごとの食器やフェルト製の食べ物、エプロン、座布団、ブロックや積木等々、みーんなおまごとの用の流し台に山盛りになっていたのです。

お迎えにみえた方を待たせることに加え、その後すぐに年中組の降園となり、狭い玄関は内外ともにごった返します。洗いのならぬ片づけものの山を見て、混雑した玄関の様子が目に見えかねたのでした、

そこへ救世主登場。新人教諭の保育室には、お帰りの時間に合わせて

年中組、年長組の担任の先輩先生が子どもたちを連れて様子を見に来てくださっていました。この日I先生と一緒に来てくれたK君もさすがに驚いたようでしたが、黙々と片づけ始めてくれました。I先生の出現に私はその時安心しきった胎児の気分だったように思います。この日、何とか降園時間を守れました。

*

有り難かったのは、保育後、I先生からかけられた「冷たい風があなたの肩の辺りをすーっと吹き抜けていたようだった」という言葉です。この言葉は私に、自分が実習生でも見習いでもなく、『もも組』の担任だという覚悟にもいた決意をさせてくれたのでした。そして私を責める言葉ではなかったことに、今でも感謝しています。

(河合)

幼児の教育

第一〇三巻 第五号

(二〇〇四年五月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十六年五月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112 東京都文京区大塚 二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108 東京都港区三田五丁目二

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六二三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。